資源管理研修(初級)

新しい資源評価票・研究機関会議 資料の読み方

(2019/11/14版)

水産研究・教育機構 中央水産研究所 資源研究センター 主任研究員 市野川桃子

内容

- 「新しい資源評価・管理」にたどりつくまで
 - ・資源評価の流れ
 - 簡単な計算方法

データの準備と資源評価(資源量の推定)

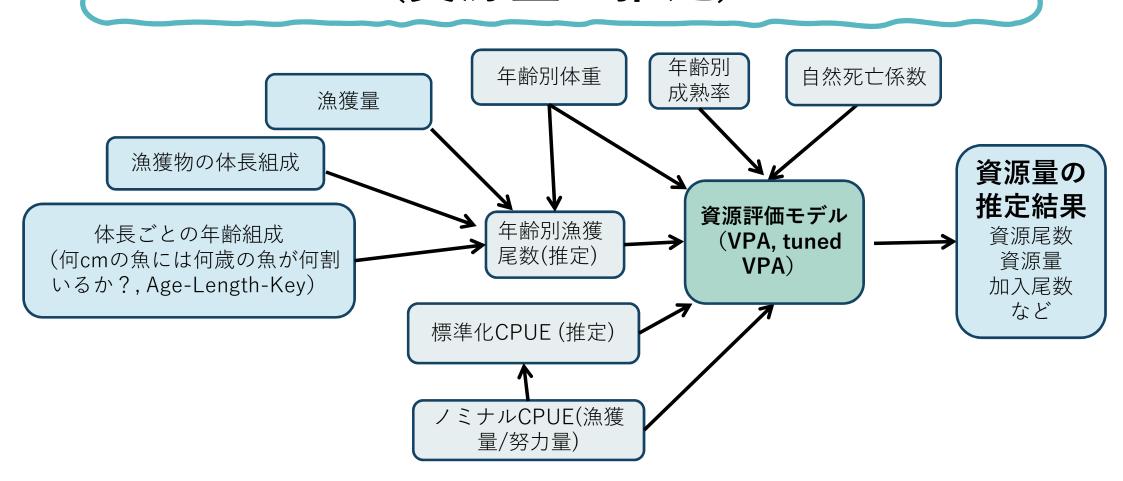
- 「新しい資源評価・管理」
 - 概念 (岡村さん)
 - ・計算の流れ
 - 簡単な計算方法

資源評価結果を使って、将来予測をしたり MSYを推定したりします

ねらい

- ・資源評価会議・研究機関会議でどのようなことを議論しているのか?
- 何が重要な推定値で、それを導くためにはどのような仮定をおしているのか?
- どの仮定はどのような考え方のもとに設定されているのか? また,代替仮説はないか?
- 計算がおかしくないか?

1. データの準備から資源評価まで (資源量の推定)



VPA=Virtual Population Analysis



- コホートを追いかけて,漁獲された分と自然に死ぬ分を足し上げ,それを資源尾数とする
- 全年齢分の情報がない最近年の 資源量については、さまざまな 仮定をおいて推定する

Popeの近似式

$$N_{a,y} = N_{a+1,y+1} \exp(M) + C_{a,y} \exp(\frac{M}{2})$$

- エクセル:水産資源解析マニュアル (6章. 資源量推定)
- RVPA (市野川・岡村. 2014. 水産海洋研究. 78. 104-113)
- 2015年資源管理研修 http://cse.fra.affrc.go.jp/ichimomo/fish/kensyu2015/kensyu2015.html

漁獲死亡係数

$$F_{a,y} = -\ln\left\{1 - \frac{C_{a,y}}{N_{a,y}} \exp(\frac{M}{2})\right\}$$

エクセルによる例

• 水研機構ホームペー:水産資源解析マニュアル https://www.fra.affrc.go.jp/kseika/guide_and_manual/afr/index.html



水産資源解析マニュアル

5. 生残率と死亡率 -魚の生き死に- 🍋	(5-survival.xls)
6. 資源量推定 - 魚の量を知る - 🎩	(6-vpa.xls)
7. 加入当たり漁獲量と加入当たり産卵親魚量 - 魚を上手に利用する - 🔎	(7-ypr_spr_2.xls)
o 市生菜服成 到了小服成长加ラ ■	/o = 66(-)

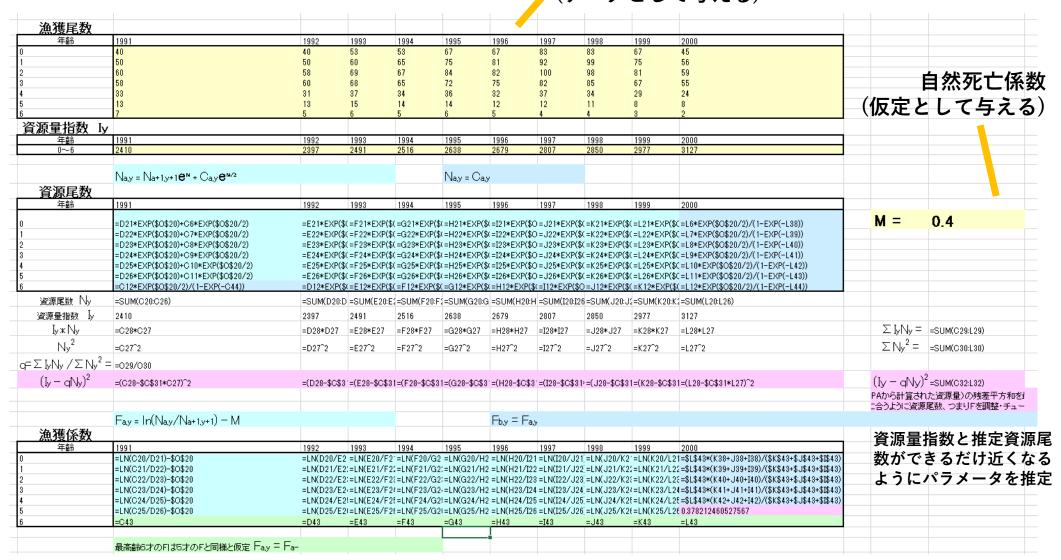
資源量指数がない場合

年齢別漁獲尾数 (データとして与える) <u>(6-vpa.xls)</u>

漁獲尾数													
年	龄 1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000			
)	40	40	53	53	67	67	83	83	67	45			
	50	50	60	65	75	81	92	99	75	56			
	60	58	69	67	84	82	100	98	81	59		自然死	一亿数
	58	60	68	65	72	75	82	85	67	55			
	33	31	37	34	36	32	37	34	29	24	(仮定)	として与	エネ る)
	13	13	15	14	14	12	12	11	8	8		,	776 97
	/	5	6	5	6	5	4	4	3	2			
				Q.	N C	S _{a,y} e ^{M/2} /	(1 _ 0-Fay	1		芋づ え	式に計算さ	くわる当	八分
	• Na,y = Na+1,y+16 + Oa,y6			-	iva,y = C	va,y ⊂ /	(1 6 °	,		J 2 0		10 0 H	75
<u>資源尾数</u>	Land	1000	1000	1001	100=	1000	100=	1000	1000				
年齢	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	_000			
	=D15*EXP(\$O\$14)+C3*EXP(\$O\$14/	′2=F15*FXP(\$O\$14)+	Γ=F15*FXP	(!=G15*EXP	(=H15*FXI	P(:=I15*FXP	(\$ =.115*FXF	0(!=K15*FXP	(!=I 15*FXP(S=L3*EXP(\$0\$14/2)/(M =	0.4
	=D16*EXP(\$O\$14)+C4*EXP(\$O\$14/			• •	•	•	• •	•	•				J
	=D17*EXP(\$O\$14)+C5*EXP(\$O\$14/			• •	•	•	* *	•	•				
	=D18*EXP(\$O\$14)+C6*EXP(\$O\$14/	2=E18*EXP(\$O\$14)+	C=F18*EXP	({=G18*EXP	(=H18*EXI	P(=I18*EXP	(\$=J18*EXF	P({=K18*EXP	: ({=L18*EXP({=L6*EXP(\$O\$14/2)/(
	=D19*EXP(\$O\$14)+C7*EXP(\$O\$14/	2=E19*EXP(\$O\$14)+	C=F19*EXP	({=G19*EXP	(=H19*EXI	P(=I19*EXP	(\$=J19*EXF	P({=K19*EXP	({=L19*EXP((=L7*EXP(\$O\$14/2)/(
	=D20*EXP(\$O\$14)+C8*EXP(\$O\$14/	'2=E20*EXP(\$O\$14)+	C=F20*EXP	({=G20*EXP	(=H20*EXI	P(=I20*EXP	(\$ =J20*EXF	P({=K20*EXP	({=L20*EXP	{=L8*EXP(\$O\$14/2)/(
	=C9*EXP(\$O\$14/2)/(1-EXP(-C31))	=D9*EXP(\$O\$14/2)	/=E9*EXP((=F9*EXP((=G9*EXP	(\$ = H9*EXP	(\$:=I9*EXP(C=J9*EXP((=K9*EXP(\$	C=L9*EXP(\$0\$14/2)/(
											出幼女	W + E	ニフレ
($\Im F_{a,y} = In(N_{a,y}/N_{a+1,y+1}) - M$			4	同一年	齢の過去3年	年の平均値	$F_{a,y} = (F_a)$	$_{,y-1} + F_{a,y}$	$_{-2} + F_{a,y-3}) / 3$	制約条	件でラ	んると
漁獲係数											= +	算でき	ス部分
年齢	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	RI	71	S EL Y
	=LN(C14/D15)-\$O\$14	=LN(D14/E15)-\$O\$	1=LN(E14/F	F1=LN(F14/C	G=LN(G14/	/H=LN(H14/	/I1=LN(I14/	J1:=LN(J14/k	(1=LN(K14/L	=(I25+J25+K25)/3			
	=LN(C15/D16)-\$O\$14	=LN(D15/E16)-\$O\$	1=LN(E15/F	F1=LN(F15/C	G =LN(G15/	/H=LN(H15/	/I1=LN(I15/J	J1:=LN(J15/k	(1=LN(K15/L	=(I26+J26+K26)/3			
	=LN(C16/D17)-\$O\$14	=LN(D16/E17)-\$O\$	1=LN(E16/F	F1=LN(F16/C	G=LN(G16/	/H=LN(H16/	/I1=LN(I16/	J1"=LN(J16/k	(1=LN(K16/L	:=(I27+J27+K27)/3	推定す	「る部分	}
	=LN(C17/D18)-\$O\$14	=LN(D17/E18)-\$O\$	1=LN(E17/F	F1=LN(F17/C	G=LN(G17/	/H=LN(H17/	′I1 =LN(I17/	J1:=LN(J17/k	(1=LN(K17/L	=(I28+J28+K28)/3	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	О Н, УС	
	=LN(C18/D19)-\$O\$14	=LN(D18/E19)-\$O\$	•	•	•	•	• •	•	•	•	20	000年の	渔獾 耳
	=LN(C19/D20)-\$O\$14	=LN(D19/E20)-\$O\$	1=LN(E19/F	F2=LN(F19/C	G:=LN(G19/	/H=LN(H19/	'I2=LN(I19/J	J2=LN(J19/k	α=LN(K19/L		•	-	
	=C30	=D30	=E30	=F30	=G30	=H30	=I30	=J30	=K30	0.8850908097	変化させるセは	その前の) 3 年平
												均と同	11.
(5 最高齢6才のFは5才のFと	同様と仮定 Fa,y	/ = Fa-1,	У				6	$F_{6,2000}/I$	=		均と同 =L31/L30	目的セル
	-								اعF _{6.2000}				
									1 0,2000				

資源量指数がある場合

年齢別漁獲尾数と資源量指数 (データとして与える)



VPAにおける仮定・推定バリエーション

共通の仮定

- 自然死亡係数:日本ではおもに、田内・田中の経験式(2.5/寿命を利用)
- プラスグループ(最高年齢)とそれより1歳若い魚の選択率の比:1を仮定
- 年齢別漁獲尾数は正しい:実際には推定値

資源量指数なしのVPA

- 最新年の漁獲の強さは、それ以前の何年かの年の平均と同じ
 - 何年平均するか?で結果が異なる
 - 獲り控えなどによって、最新年の漁獲を減らした場合、過去年と同じ漁 獲の強さと仮定するのは危険

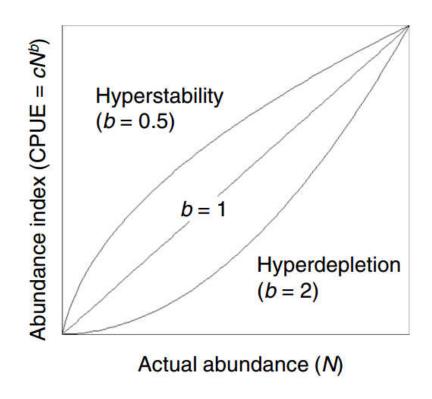
VPAにおける仮定・推定バリエーション

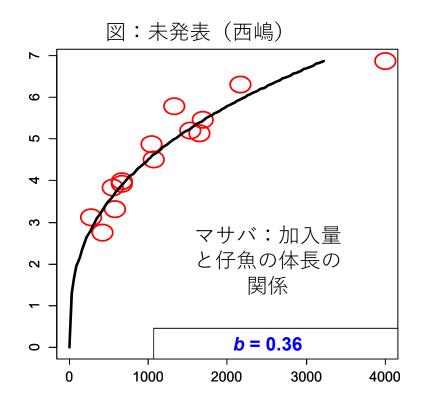
資源量指数ありのVPA (tuned VPA)

- 資源量指数の選択・重み付け
- どのパラメータを推定するか?
 - <u>最新年の全部の漁獲係数を推定(全F推定)</u>:有効な資源量指数が複数ある場合に可能. 資源量指数が十分でないと,推定が不安定に(リッジペナルティの利用)
 - <u>最新年・最高齢の漁獲係数のみを推定:</u>最新年の選択率は仮定(任意の 年を選ぶ、二段階法、選択率更新法など)
- 資源量指数と資源尾数の非線形性の推定

非線形性の推定

資源量と資源量指数のあいだの非線形性パラメータbの仮定 (Hashimoto et al. Fish. Sci. 2018)





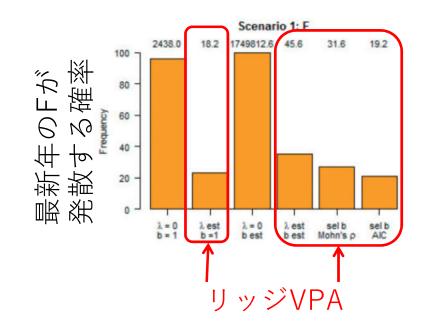
リッジペナルティ (ridge-VPA)

• 最新年のFが非常に大きくなってしまう問題の対処(リッジVPA, Okamura et al. ICES Journal.2018)

$$(1-\lambda) \sum\nolimits_{k=1}^K \sum\nolimits_{y=1}^Y \left[\log\left(\sigma_k\right) + \frac{\left(I_{k,y} - \mu_{k,y}\right)^2}{2\sigma_k^2} \right] + \lambda \sum\nolimits_{a=1}^A \left|F_{a,Y}\right|^\beta$$

資源尾数と資源量指数との あいだのずれの大きさ

最新年の漁獲 係数の和



両者の合計を最小化 (重みの配分: λ)

λは、レトロスペクティヴパターンが最小になるように探索的に決める

Rによる例

- ・リッジVPAやb推定など、VPAも複雑化→エクセルの限界
- VPAを用いた我が国水産資源評価の統計言語Rによる統一的検討 (市野川・岡村. 2014. 水産海洋研究. 78. 104-113)
 - プロトタイプ版: http://cse.fra.affrc.go.jp/ichimomo/
 - 最新版(Rパッケージ):https://github.com/ichimomo/frasyr

https://github.com/ichimomo/frasyr



frasyr

- Fisheries Research Agency (FRA) provides the method for calculating sustainable yield (SY) with R
- 水研機構で開発した,MSYを基礎とした目標管理基準値を計算するためのRのパッケージです。開発途中のものであ ること、ご承知おきください. パッケージのインス トール方法

使い方

```
# install.package("devtools") # <-- devtoolsをインストールしていない人はインストールする
#マスター版(最新・安定版)をインストールする場合
devtools::install github("ichimomo/frasyr")
# 開発中の最新版をインストールする場合(バグ可能性あり!)
  ref=""で開発中のブランチを指定します。だいたい、"dev"ブランチに開発中のものがあります
devtools::install github("ichimomo/frasyr", ref="dev")
# 過去の安定版を指定してインストールする場合
    @以下にしてしたリリースバージョンを指定します
devtools::install_github("ichimomo/frasyr@v1.00")
# 以上の操作をしてfrasyrをインストールしてから、以下のコマンドで呼び出します
library(frasyr)
```

マニュアルへのリンク

マニュアル

- VPAによる資源量推定 https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/vpa.html
- 新ルールのもとでの将来予測計算 https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/future.html
- 管理基準値の計算 https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/estMSY.html
- 再生産関係決定ガイドライン https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/SRR-guidline.html
- 今後追加予定

開発ワークフロー(開発者向け)

ブランチ構成

- master: 公開用のブランチ. いつでも動くようにしておく
- dev:開発用ブランチ. 新規変更はこちらのブランチにアップすること

Rコマンド

```
## VPA計算 ---
## https://github.com/ichimomo/frasyr
caa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-
raw/ex2_caa.csv", row.names=1)
waa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-raw/ex2_waa.csv", row.names=1)
maa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-raw/ex2_maa.csv", row.names=1)
dat <- data.handler(caa=caa, waa=waa, maa=maa, M=0.5)
# VPAによる資源量推定
res vpa < - vpa(dat,fc.year=2015:2017,tf.year = 2015:2016,
          term.F="max",stat.tf="mean",Pope=TRUE,tune=FALSE,p.init=0.5)
```

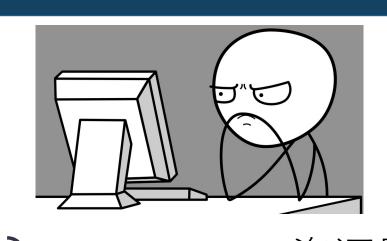
注:隠しオプション多数あり!

https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/vpa.html

Rコマンド

```
## VPA計算 ---
## https://github.com/ichimomo/frasyr
caa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-
raw/ex2_caa.csv", row.names=1)
waa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-raw/ex2_waa.csv", row.names=1)
maa <- read.csv("https://raw.githubusercontent.com/ichimomo/frasyr/dev/data-raw/ex2_maa.csv", row.names=1)
dat <- data.handler(caa=caa, waa=waa, maa=maa, M=0.5)
# VPAによる資源量推定
res_vpa < -vpa(dat,fc.year = 2015:2017,tf.year = 2015:2016,
          term.F="max",stat.tf="mean",Pope=TRUE,tune=FALSE,p.init=0.5)
```

さまざまな資源評価手法: <u>どんなときにどんな方法を</u>使うか?



データ・知見

- 努力量^{*}
- 漁獲量
- 漁獲物の体長組成
- 漁獲物の年齢組成
- 生物的知見(成長・成熟など)

→ 資源量指数 (漁獲量/努力量)

年齡別漁獲尾数

努力量 **一>** 資源量指数

データ不足

漁獲物の休長組成漁獲物の年齢組成

- 年齢別漁獲尾数

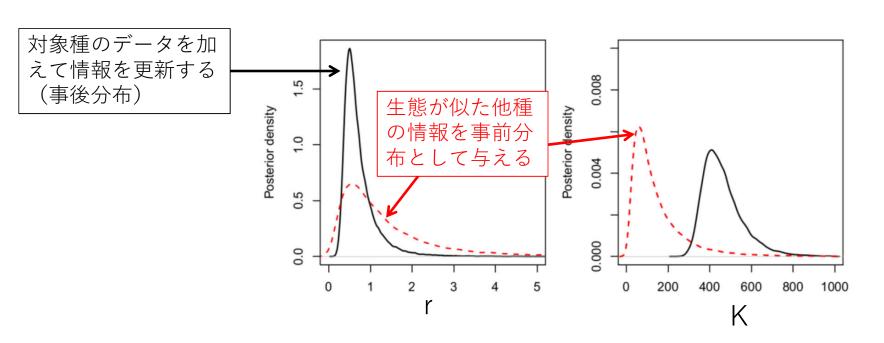
生物的知見(成長・成熟など)

→ プロダクションモデル

・ ロジスティックモデルを資源量指数と漁獲量にあてはめ、プロダクショ 特徴 ンモデルのパラメータ(r, K, B0, q)を推定する 利点 • 漁獲量と資源量指数だけで、資源量もMSY管理基準値も推定できる • 推定値の不確実性はかなり高い. 変数間の相関も高い. 欠点 • コントラスト(漁獲によって資源が急減→その後復活など)の強いデー タでないとうまく推定できない. • エクセル:水産資源解析マニュアル (10章プロダクションモデル) • R: 2013年度資源管理研修(21日後半) 解説 http://cse.fra.affrc.go.jp/ichimomo/fish/ichinokawa_R.pdf R: 2019年資源管理研修(上級,西嶋) 20

ベイジアン・プロダクションモデル

- 全てのパラメータを推定するのはほぼ不可能→一部パラメータは推定せず, 与える(ex. 内的自然増加率のrなど)
- 特定のパラメータに事前分布を与えるベイズ型プロダクションモデル



NPFC サンマ作業部 会資源評価レポート より 21 努力量 → 資源量指数 海獲易

漁獲物の体長組成漁獲物の年齢組成生物的知見(成長

- 年齡別漁獲尾数

生物的知見(成長・成熟など)

Statistical

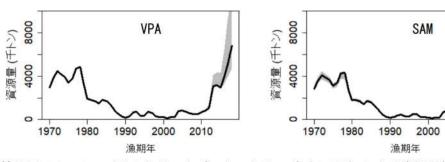
Catch at age
(SCAA)

データ十分

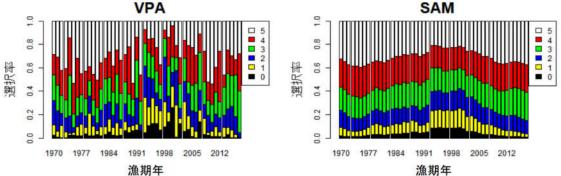
特徴	海外ではよく使われている。漁業ごとに選択率を仮定。毎年の加入量を推定し、そこから前進計算。
利点	年齢別漁獲尾数の誤差をモデル化できる→不確実性の評価再生産関係をモデル内で推定→MSYをモデル内で推定できる年齢別漁獲尾数の欠損もある程度許す
欠点	・ 漁業種別の年齢別漁獲尾数が必要。・ その漁業種内で、選択率がある程度一定とする仮定
解説	• 2019年資源管理研修・上級

SCAA: 最近の流れ

- 選択率の柔軟な変化を許すState-Space Assessment Model (SAM, Nielsen and Berg 2014 Fisheries Research) (右図)がヨーロッパ(ICES)の資源評価でVPAに 代わって利用されるように
- マサバ太平洋系群など、VPAにかわる資源モデルとして適用検討中



1970 1980 1990 2000 2010 1970 1980 1990 2000 2010 漁期年 漁期年 漁期年 補足図 6-2. ノンパラメトリックブートストラップ (500 回) による資源量推定値の 80% 信頼区間 (左図: VPA、右図: SAM、灰色部分は 80%信頼区間)



補足図 6-4. VPA と SAM による選択率の推定値(左図: VPA、右図: SAM) 最高齢 6+ 歳を除く 0歳から 5歳までの漁獲係数の和が 1 となるように変換した。

2018年度太平洋マサバ資源評価:補足資料より http://abchan.fra.go.jp/digests2018/details/201805.pdf

漁獲物の体長組成漁獲物の年齢組成

生物的知見(成長・成熟など)

→ デルリー法

データ不足

	•	日別・月別の資源量指数と漁獲量が利用でき、閉じた資源で、漁獲圧が
特徴		高い場合に利用できる.
	•	漁期内で漁獲が進むにつれて資源量指数が減る➡その程度の大きさから
		漁獲前の資源量を推定。
	•	わが国資源評価でも以外と使われている(スルメイカ・伊勢三河湾イカ

- 利点
- 漁獲量と資源量指数のみから資源量が推定できる

ナゴ・伊勢三河湾トラフグ・神奈川県ナマコ)

- 欠点
- 単年の資源量推定のみ. ただし, デルリー法+プロダクションモデルを 組み合わせた方法も(神奈川県ナマコ資源評価, Nakayama et al. Fish Sci., in press)

努力量 **→→** 資源量指数

漁獲物の体長組成 年齢別漁獲尾数 漁獲物の年齢組成

生物的知見(成長・成熟など)

データ中程度

→ 体長ベースの統合モデル

特徴

- ・ 漁獲物の体長組成と成長式から、年齢別漁獲尾数 をモデル内で推定する
- ・ 太平洋クロマグロなど国際資源、米国西海岸の資源でよく利用

利点

- 年齢別漁獲尾数がモデル内部で推定されるので、 年齢別漁獲尾数を外部で推定する手間が省ける& 不確実性が評価できる
- 体長組成データの欠損も許す

欠点

• モデルが複雑で、モデル調整に職人技が必要

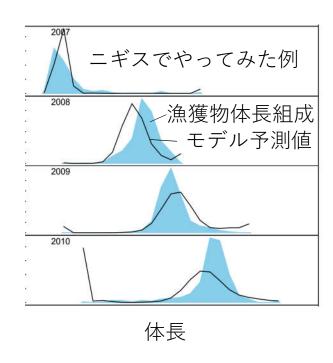
解説

統合モデル検討会のページ:

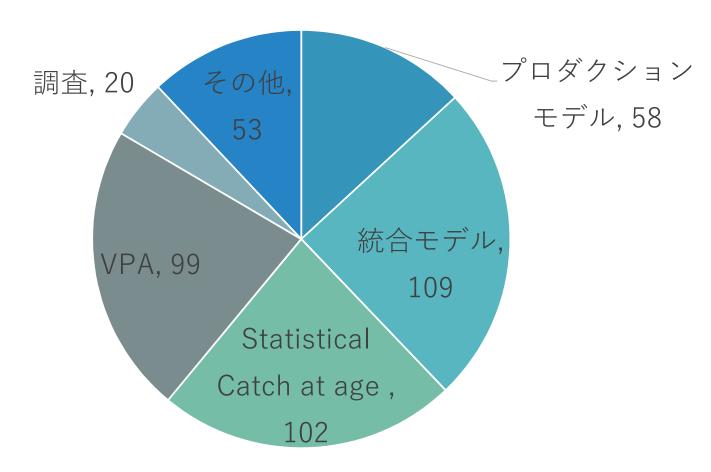
http://cse.fra.affrc.go.jp/ichimomo/ss-kento/ss-

kentos.html (開催報告:市野川ら(2015)日本水産学会誌.

81. 756-761)



世界の中での資源評価モデルの利用

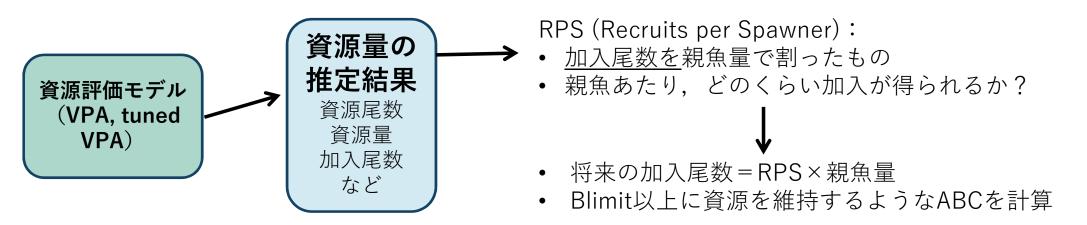


今後の資源評価→200種に拡大

- さまざまな資源評価モデルの利用:データとモデルのマッチングが大事
 - とくに、年齢査定データがあまりないローカルな資源のデータでも、ベイジアン・プロダクションモデル、デルリー法、 統合モデルが利用できるかも

2. 資源評価結果を使って、将来予測をしたり MSYを推定したりします

いままでのやり方



いままでのやり方

RPS (Recruits per Spawner):

- 加入尾数を親魚量で割ったもの
- 親魚あたり, どのくらい加入が得られるか?
- 将来の加入尾数=RPS×親魚量
- Blimit以上に資源を維持するようなABCを計算

親の密度が多くても・少なくても親あたりの加入 は同じ?

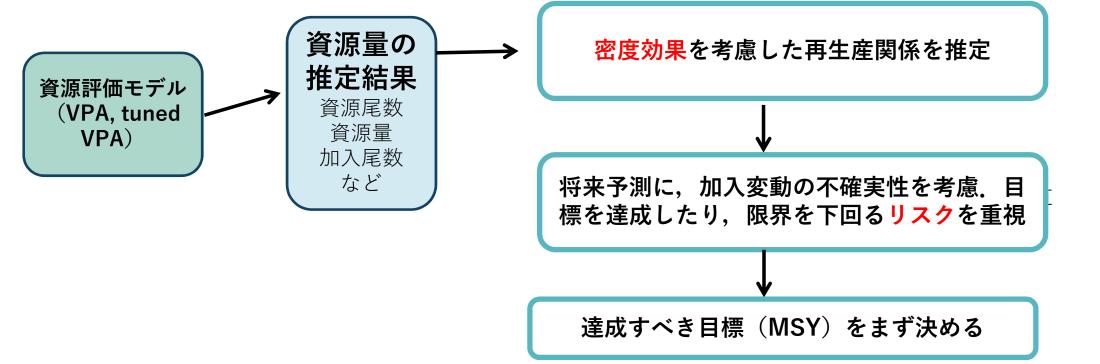
親が混みすぎていたら、親魚あたりの加入はそれ に応じて少なくなるのでは? (密度効果)

RPS=加入尾数は環境によって毎年変動するのでは?悪い加入がつづけておこったりした場合にそなえなくて大丈夫?

Blimit以上だったらどこでも良い? だったら、Blimitぎりぎりがいいな...

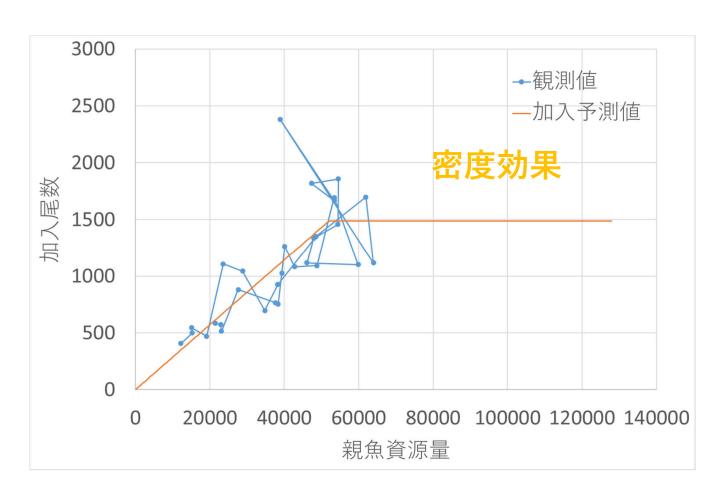
2. 資源評価結果を使って、将来予測をしたり MSYを推定したりします

新しいやり方

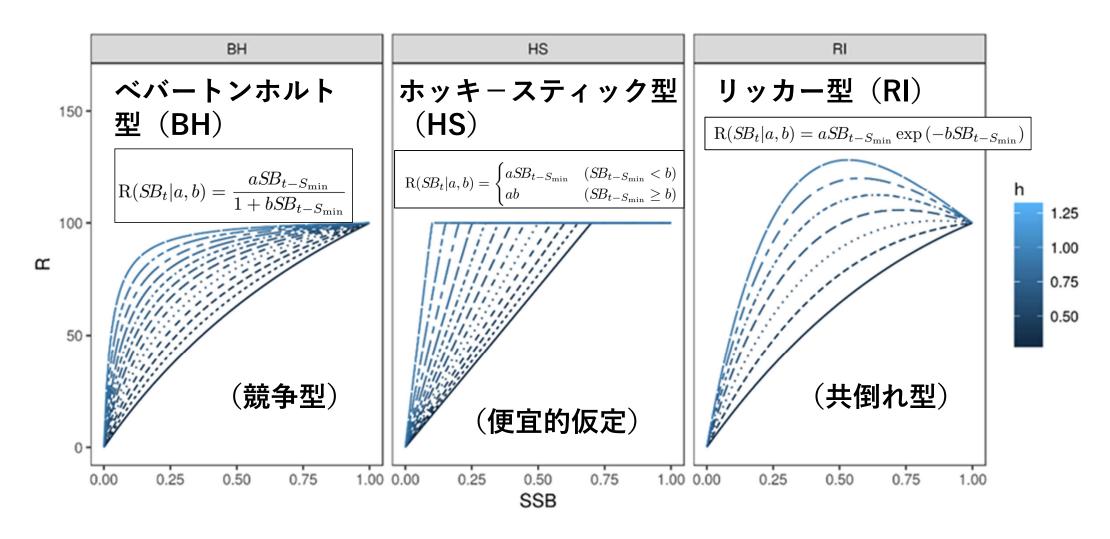


再生産関係の推定

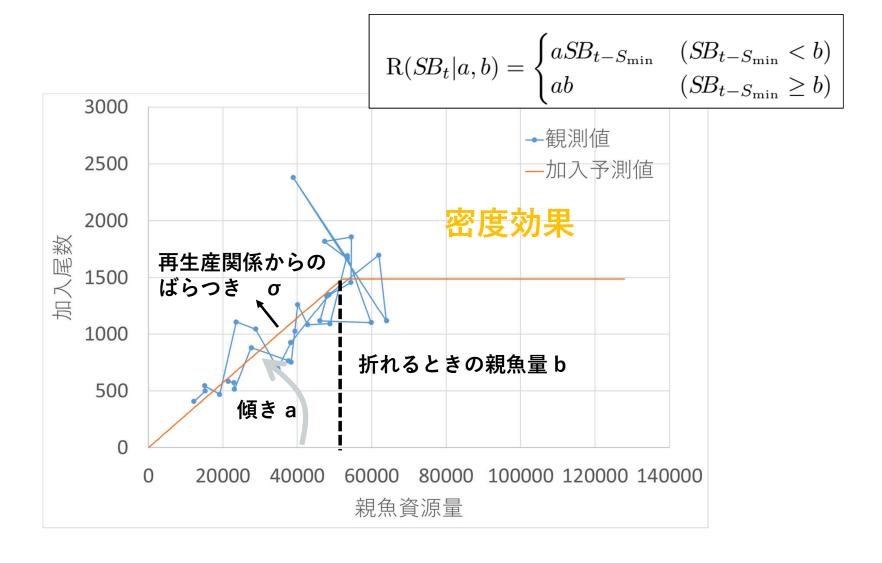
- 1. 横軸に親魚資源量をとり、縦軸に加入量をとる.
- 2. 両者の関係をモデル化する



主な再生産関係



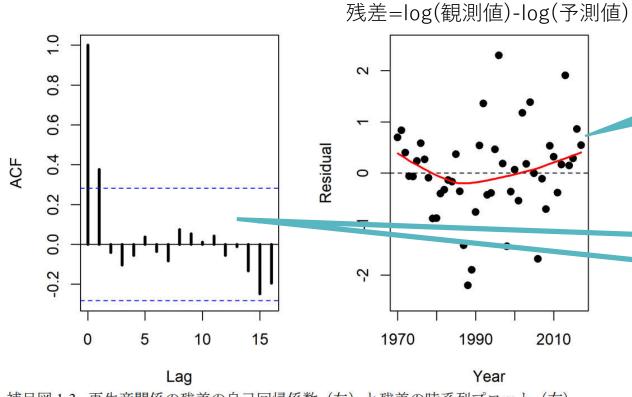
再生産関係のパラメータ



再生産関係推定のバリエーション

- 関数の形:BH, RI, HS
- パラメータ推定法
 - 最小二乗法(=二乗誤差を最小化)
 - 最小絶対値法(= 誤差の絶対値を最小化)
- •自己相関
 - 残差に自己相関があるか?

残差の自己相関

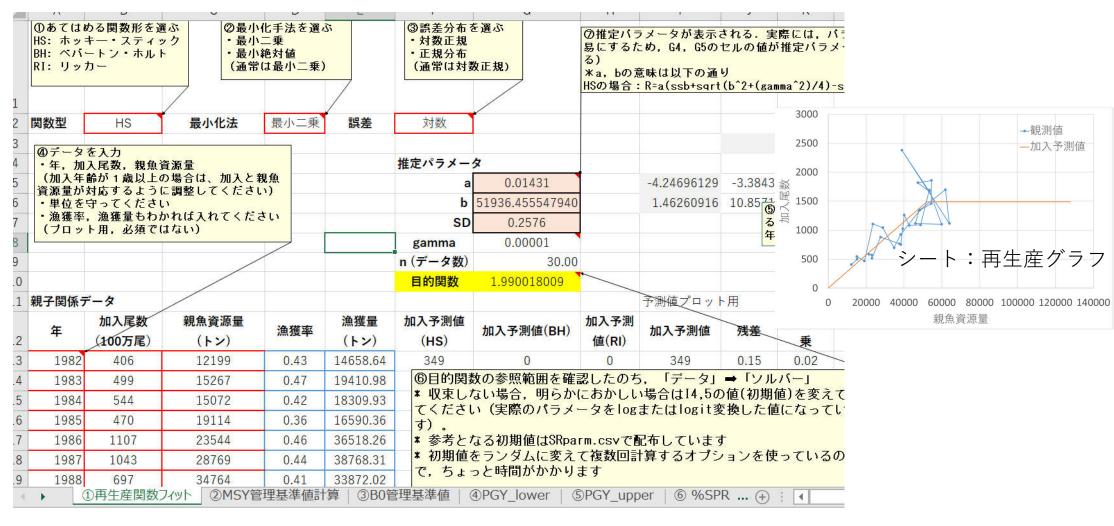


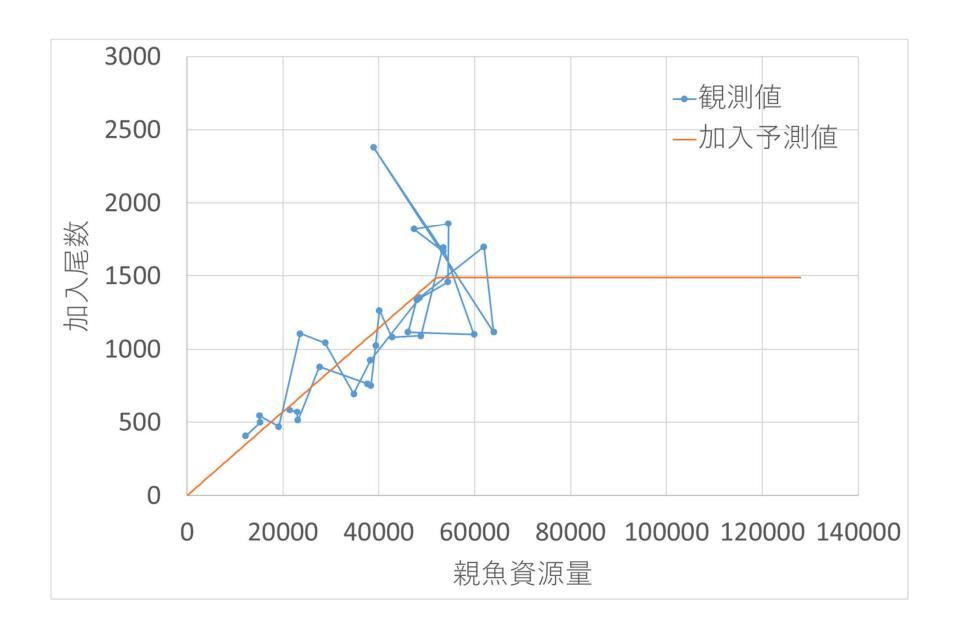
補足図 1-3. 再生産関係の残差の自己回帰係数(左)と残差の時系列プロット(右)。

年代によって、予測値よりも観 測値が低くなったり、高くなっ たりする傾向がある=自己相関

Rのacf関数に時系列を入れると、 自己相関が有意に高いかどうか 検定してくれる

エクセルによる例(MSY_est.xls)*自己相関の推定はできません

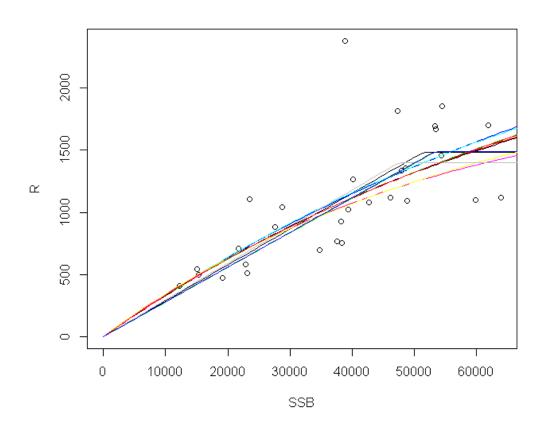




Rでやる場合

```
## 再生産関係の推定と管理基準値計算 ---
## https://ichimomo.github.io/frasyr/doc/estMSY.html
SRdata <- get.SRdata(res_vpa)
## モデルのフィット(網羅的に試しています)
#網羅的なパラメータ設定
SRmodel.list <- expand.grid(SR.rel = c("HS","BH","RI"), AR.type = c(0, 1), L.type = c("L1", "L2"))
SR.list <- list()
for (i in 1:nrow(SRmodel.list)) {
  SR.list[[i]] <- fit.SR(SRdata, SR = SRmodel.list$SR.rel[i], method = SRmodel.list$L.type[i],
    AR = SRmodel.list$AR.type[i]. hessian = FALSE)
SRmodel.list$AICc <- sapply(SR.list, function(x) x$AICc)
SRmodel.list$delta.AIC <- SRmodel.list$AICc - min(SRmodel.list$AICc)
SR.list <- SR.list[order(SRmodel.list$AICc)] # AICの小さい順に並べたもの
(SRmodel.list <- SRmodel.list[order(SRmodel.list$AICc),]) # 結果
```

plot_SRdata(SRdata) for(i in 1:nrow(SRmodel.list)) lines(SR.list[[i]]\$pred,col=i)



研究機関会議資料では...

こんな表が出てきます

再生産 関係式	最適化法	AICc	ΔΑΙС	SD	データ 数
HS	最小絶対値法	128.48	0.00	0.93	48
RI	最小絶対値法	129.35	0.88	0.93	48
ВН	最小絶対値法	129.36	0.88	0.93	48
HS	最小二乗法	130.91	2.44	0.88	48
ВН	最小二乗法	131.34	2.87	0.89	48
RI	最小二乗法	131.35	2.87	0.89	48

*候補として推奨する再生産関係を太字とした

平成 31 (2019) 年度マサバ太平洋系群の管理基準値等に関する 研究機関会議報告書 (p.2) より https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/detail_masaba_p.pdf

再生産関係選択の基準

- a. 予測力
- b. 生物学的妥当性 or 便宜的仮定
- c. 外れ値に対する頑健性
- d. 観察された最大親魚量以上で、加入尾数が過去に観察された最大尾数以上の極端な外挿値になるような場合の回避
- e. 観察された最低親魚量以下で加入尾数が保守的でない外挿値になるよう な場合の回避
- f. 推定された管理基準値の頑健性
- g. 異なる再生産関係を用いた場合のリスクの非対称性
- h. 自己相関
- i. 管理方策の頑健性(MSE による評価)

付録.再生産関係の決定に関するガイドライン

 $http://abchan.fra.go.jp/nc/htdocs/?action=cabinet_action_main_download\&block_id=1543\&room_id=765\&cabinet_id=78\&file_id=6204\&upload\ id=9747$

4. 適用事例集

平成31年4月研究機関会議(7系群)

系群	再生産関係	選択基準	説明	
スケトウダラ	HS, L2,	3e	HS は AICc 最小モデル (RI, Δ AICc=8.1)よりも予測力が	
太平洋系群	AR0		低いが、親魚が少ない範囲で RI が加入を過大評価するリ	
		м	スクを避けた	
		3b, 3f	RI の場合 2010~2014 年の 5 年間のデータのみが曲線の形	
			を決めるため、生物学的背景の吟味および関係式間での	
			MSY 管理基準値算出値の比較の上で RI の使用を避けた	
スケトウダラ	HS, L2,	3d	HS, RI, BH ともに直線的な再生産関係になり AICc はほぼ	
日本海系群	AR0		変わらないため、観察された最大親魚量以上で極端な加入	
			の外挿を避ける HS を選択	
ホッケ道北系	HS, L1,	3a, 3c	AICc が最小のモデルを選択. 結果として, L1 が選択され	
群	AR0		たため、外れ値に対しても頑健なモデルとなった.	
		3i	簡易的な MSE を行い、近年の低い加入を想定した場合の	
			リスクを漁獲制御ルールにおいて考慮した(図4).	

マサバ太平洋	HS, L2,	3h	残差の自己相関が有意だったため,将来予測では加入の自
系群	AR1		己相関構造も考慮した. これにより加入の自己相関から生
			じる潜在的なリスクを管理基準値に取り入れることができ
			た (図 5). また, 近年の残差は正であったため, 直近年の
			将来予測は加入が通常よりも良い状況となることが仮定さ
			れた.
マサバ対馬暖	HS, L2,	3e	HS は AICc 最小モデル (RI, ΔAICc=5.9) よりも予測力
流系群	AR0		が低いが、親魚が少ない範囲で RI が加入を過大評価する
			リスクを避けた (図 6)
ゴマサバ太平	HS, L1,	3e, 3g	RI は AICc 最小モデル(BH or HS, ΔAICc=6.4 or 6.5)
洋系群	AR0		よりも予測力が低いが、親魚が少ない範囲で RI が加入を
			過大評価するリスクを避けた
ゴマサバ東シ	HS, L1,	3f	図7の解説を参照
ナ海系群	AR0	3g	図8の解説を参照

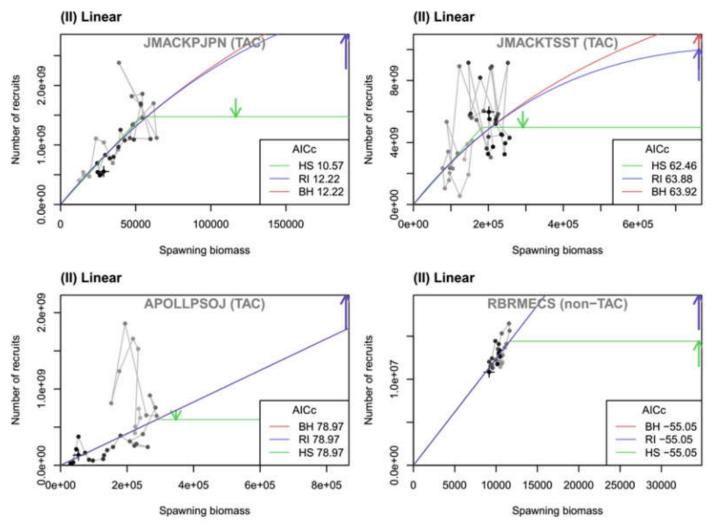


図 2. 加入尾数の期待値が過去最大加入尾数以上の極端な外挿値になるために BH や RI の使用は勧められないケース(Ichinokawa et al. 2017, Figure S3)

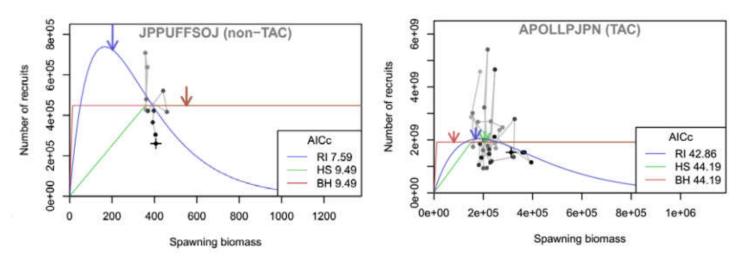


図 3. 極端な外挿がおこるために RI (左), BH (右) の使用は勧められないケース (Ichinokawa et al. 2017, Figure S3)

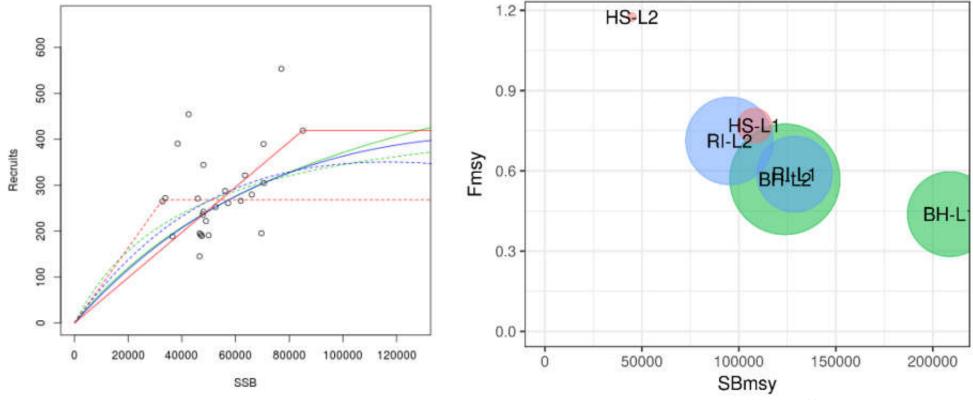
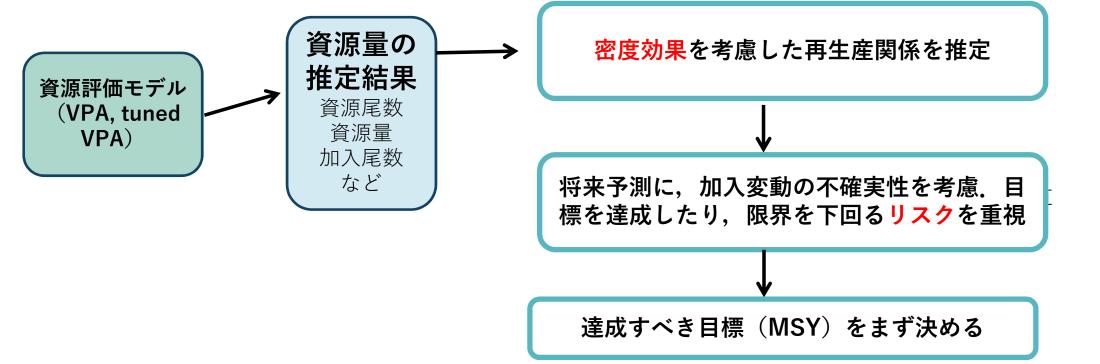


図 7. ゴマサバ東シナ海系群における 6 つの再生産関係のあてはめの結果 (左) と,推定された管理基準値 (右). 右図では,再生産関係式・最適化法ごとに推定された管理基準値の値をプロットし,丸の大きさは Akaike Weight に比例させた (最大の Akaike Weight は BH-L2 で 0.289,最小は HS-L2 で 0.07). HS の L1 と L2 間での AICc の差は大きくないが, HS-L1 から推定される管理基準値は,より AICc が小さい他の再生産モデルから推定される管理基準値に近く,再生産曲線の選択に対して管理基準値が頑健と考えられる.

2. 資源評価結果を使って、将来予測をしたり MSYを推定したりします

新しいやり方



選択した再生産関係のもとで 将来予測&管理基準値計算:手順

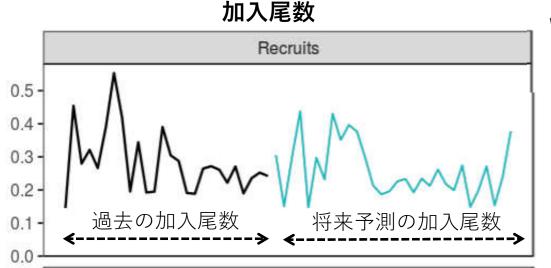
- ① 毎年の加入尾数を再生産関係に従って発生させる
 - 予測値と観察値のばらつきを確率分布からランダムに発生
- ② 最新年の資源尾数から前進計算する
- ③ 繰り返し計算し、平均や信頼区間を見る
- ④ 将来の漁獲の強さのシナリオごとの違いを見る
 - 現状の漁獲圧(最近年の平均),新しい管理ルール

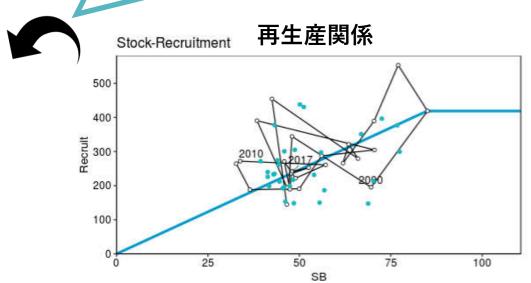
<u>https://ichimomo.shinyapps.io/shiny-future/</u> (サバを例にしたウェブアプリ) <u>https://github.com/ichimomo/future-text</u> のpdfファイル(計算方法の詳細)

① 毎年の加入尾数を再生産関係に従って発生させる

シミュレーションの一例

仮定した再生産関係と実際にみられ たばらつき具合から加入をランダム に発生させる



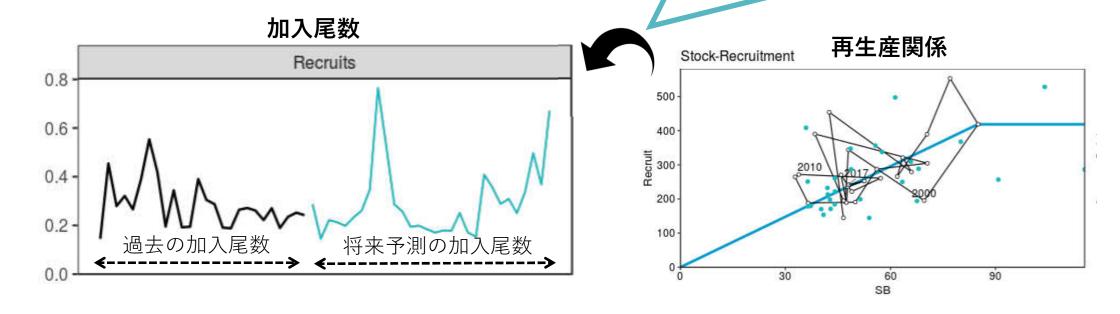


https://ichimomo.shinyapps.io/shiny-future/ ゴマサバ東シナ海の例

① 毎年の加入尾数を再生産関係に従って発生させる

シミュレーションの一例

仮定した再生産関係と実際にみられ たばらつき具合から加入をランダム に発生させる

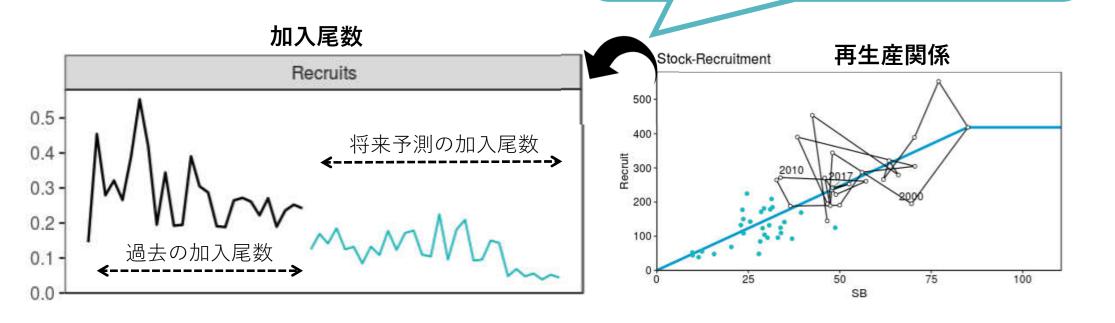


https://ichimomo.shinyapps.io/shiny-future/ ゴマサバ東シナ海の例

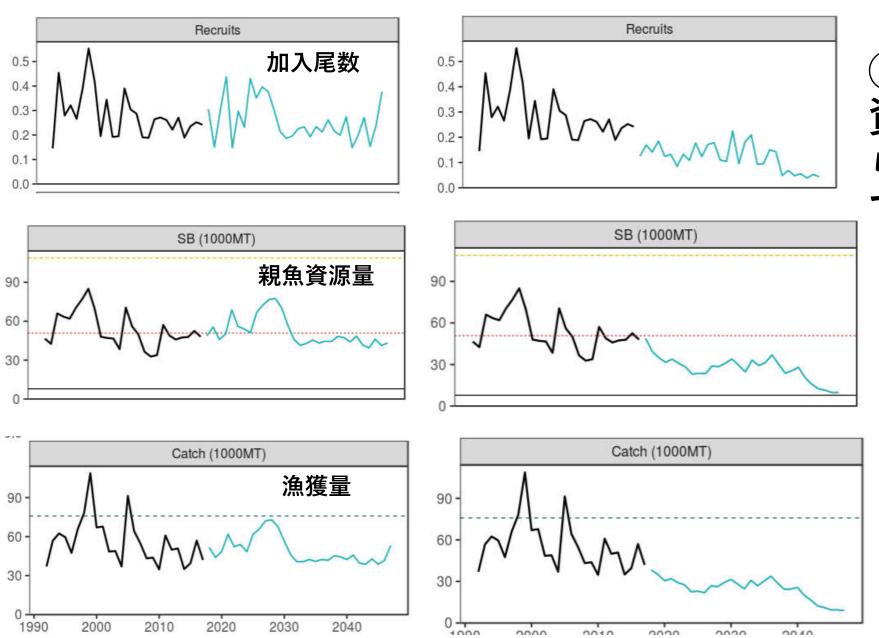
①毎年の加入尾数を再生産関係に従って発生させる

シミュレーションの一例

仮定した再生産関係と実際にみられ たばらつき具合から加入をランダム に発生させる

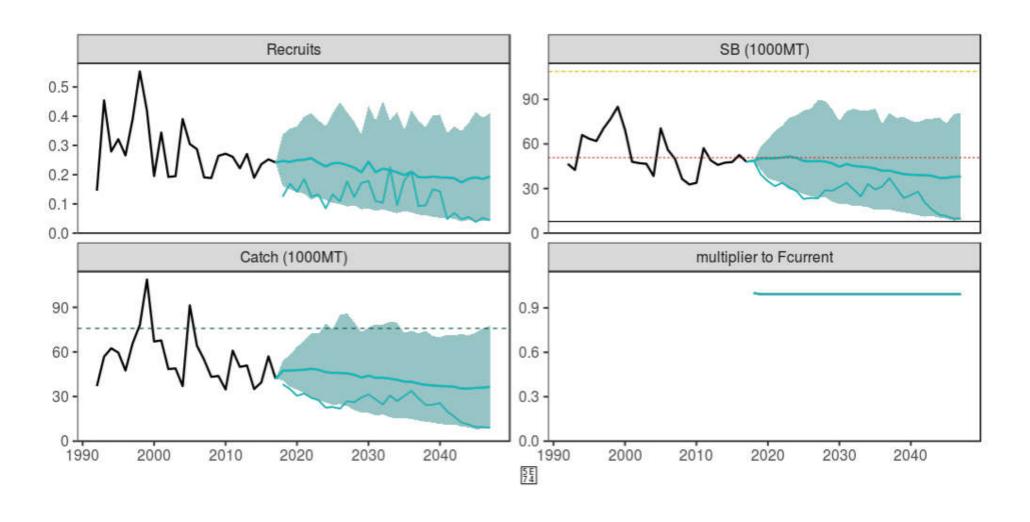


https://ichimomo.shinyapps.io/shiny-future/ ゴマサバ東シナ海の例

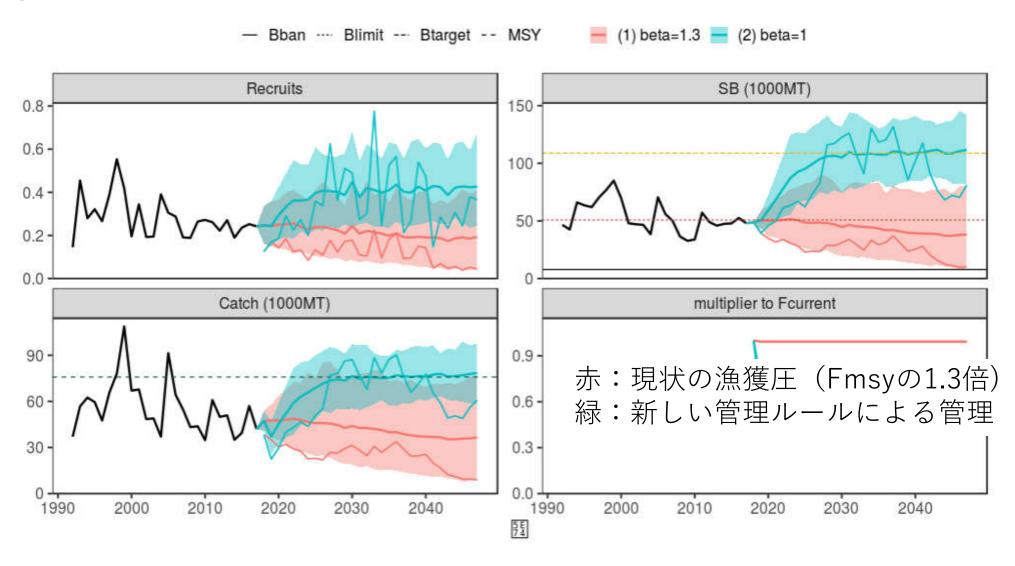


②最新年の 資源尾数か ら前進計算 する

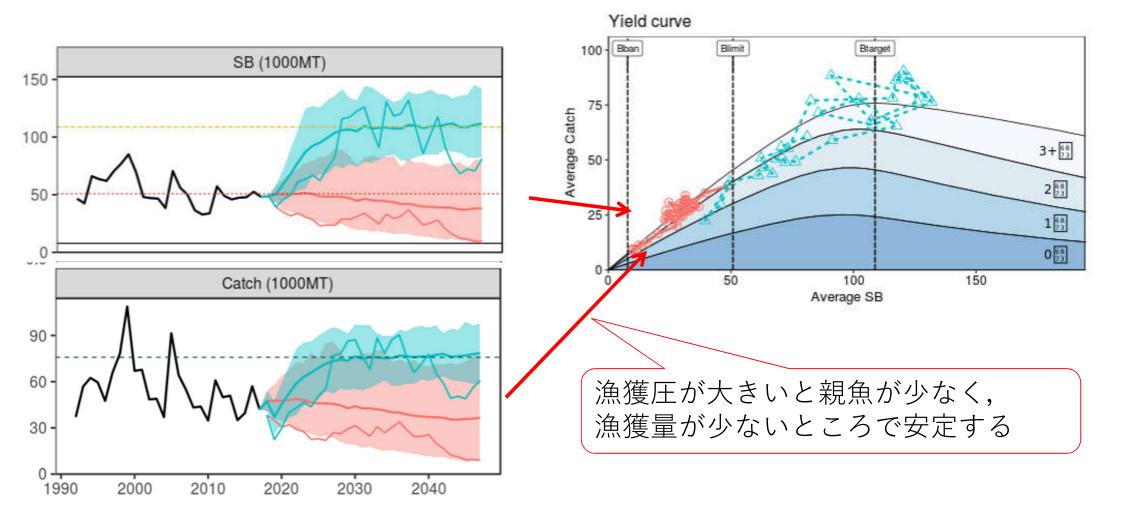
③ 繰り返し計算し、平均や信頼区間を見る



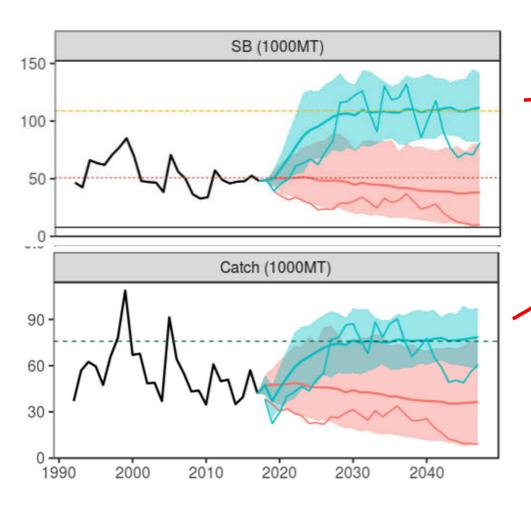
④ 将来の漁獲の強さのシナリオごとの違いを見る

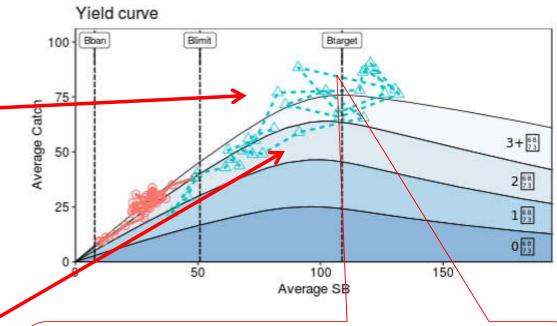


MSY管理基準値の意味



MSY管理基準値の意味



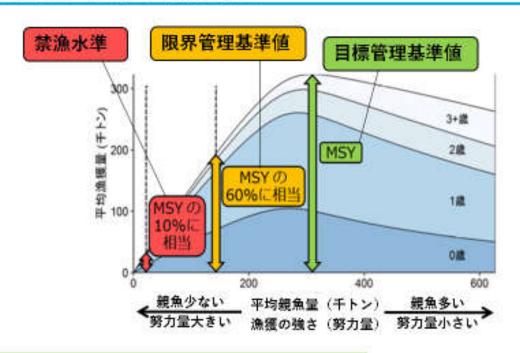


漁獲圧が小さいと親魚が多くなり、漁獲量はある一定のFのときにピークになる=そのときの漁獲量がMSY、そのときの親魚量がBMSY(=目標管理基準値)、そのときのFがFMSY

① 資源管理の目標を導入(その8)

管理基準値の提案

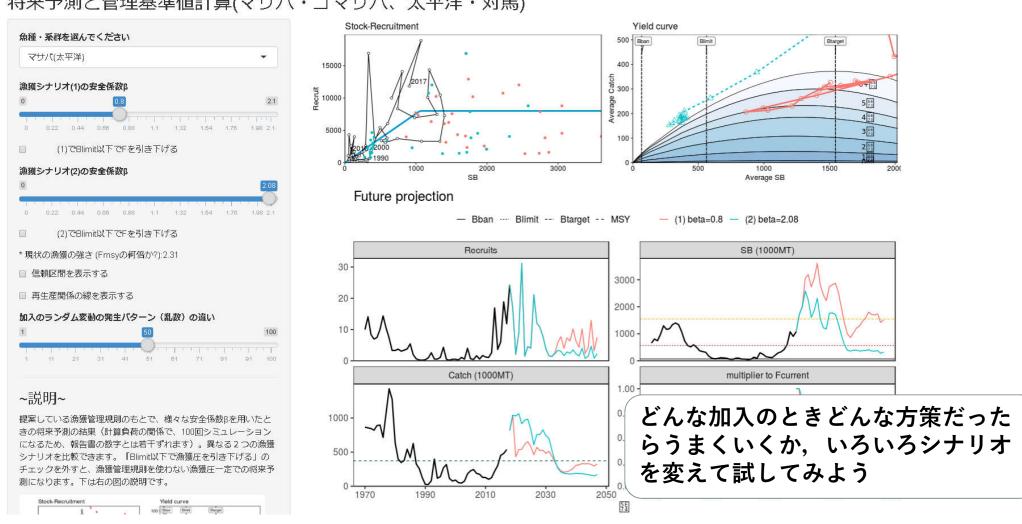




- 目標管理基準値(MSYを達成する資源水準の値): MSYを得られる時の親魚量水準を基本とする。漁獲圧を一定にした時、親魚量がこの水準に維持される時の漁獲圧をFMSY (目標を達成するための漁獲圧)とする。
- 限界管理基準値(乱かくを未然に防止するための資源水準の値): MSYの60%の平均 漁獲量を得る水準を基本とする。資源がこの水準を下回ったら、漁獲圧を資源状況に応じて 引き下げる。
- 禁漁水準(これを下回った場合には漁獲を0とすべき資源水準の値):資源の減少により、
 平均漁獲量がMSYの10%しか得られない水準を基本とする。

ウェブ上で先行4魚種の将来予測の例が見れます

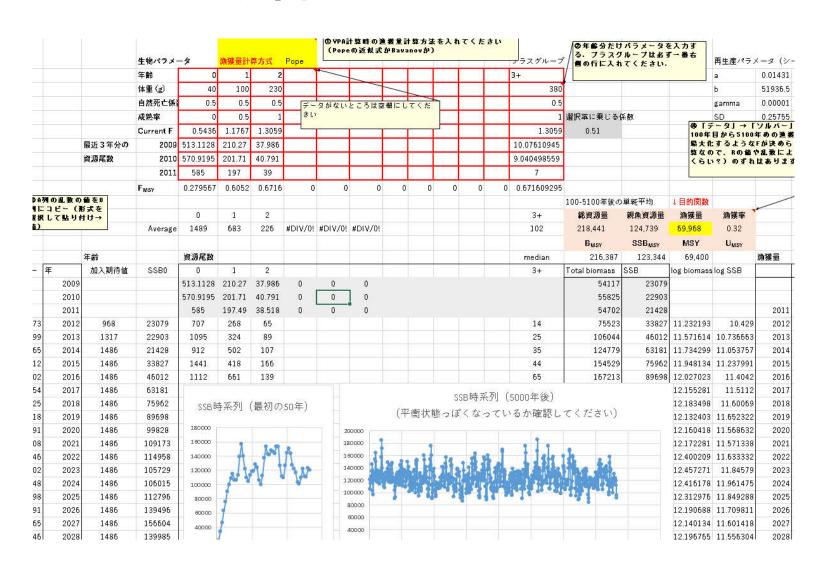
将来予測と管理基準値計算(マサバ・ゴマサバ、太平洋・対馬)



計算ツール

- エクセル:MSY_est.xlsx
 - 近似的な計算方法なので、正確ではないかもです
 - 自己相関がある場合には対応していません
 - 重いです
- R
 - frasyr内の関数を使って計算できます
 - コマンドを集約したユーティリティもあります(frasyr_tool) https://github.com/ichimomo/frasyr_tool

エクセルの場合



Rコマンド

```
## 将来予測の実施
SRmodel.base <- SR.list[[1]] # AIC最小モデルを今後使っていく
res future Fcurrent <- future.vpa(res vpa,
          multi=1,
          nyear=50, # 将来予測の年数
          start.year=2011, # 将来予測の開始年
          N=100, #確率的計算の繰り返し回数=>実際の計算では1000~5000回くらいやってください
          ABC.year=2019, # ABCを計算する年
          waa.vear=2015:2017. # 生物パラメータの参照年
          maa.year = 2015:2017,
          M.year=2015:2017,
          is.plot=TRUE, # 結果をプロットするかどうか
          seed=1.
          silent=FALSE.
          recfunc=HS.recAR, # 再生産関係の関数
          # recfuncに対する引数
          rec.arg=list(a=SRmodel.base$pars$a,b=SRmodel.base$pars$b,
                rho=SRmodel.base$pars$rho,# ここではrho=0なので指定しなくてもOK
                sd=SRmodel.base$pars$sd,resid=SRmodel.base$resid))
```

Rコマンド

)#計算したいB0%レベル

```
## MSY管理基準値の計算
res MSY <- est.MSY(res vpa, # VPAの計算結果
       res future Fcurrent$input, # 将来予測で使用した引数
       resid.year=0, # ARありの場合、最近何年分の残差を平均するかをここで指定する。ARありの設定を反映させた
い場合必ずここを1以上とすること(とりあえず1としておいてください)。
       N=100, # 確率的計算の繰り返し回数=>実際の計算では1000~5000回くらいやってください
       calc.yieldcurve=TRUE,
       PGY=c(0.95,0.9,0.6,0.1), # 計算したいPGYレベル。上限と下限の両方が計算される
       onlylower.pgy=FALSE, # TRUEにするとPGYレベルの上限は計算しない(計算時間の節約になる)
       B0percent = c(0.2, 0.3, 0.4),
       Bempirical=c(round(tail(colSums(res vpa$ssb),n=1)),
            round(max(colSums(res vpa$ssb))),
            24000, # 現行Blimit
            SRmodel.base$pars$b) # HSの折れ点
```